

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月30日現在

機関番号：17701

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23820038

研究課題名（和文） 「力の快」に定位したニーチェ解釈

研究課題名（英文） An Nietzsche Interpretation from Standpoint of "Pleasure of Power"

研究代表者

新名 隆志 (NIINA TAKASHI)

鹿児島大学・教育学部・准教授

研究者番号：30336078

研究成果の概要（和文）：

本研究は、後期ニーチェの「力の快」の思想を明らかにすることにより、ニーチェ思想の展開とその中心思想について従来の解釈の問題点を克服する新しい解釈を提示した。

「力の快」の観点からニーチェの悲劇観の決定的変化と中心思想の意義が鮮明になること、また、主著『ツァラトストラ』の精確な読解と従来の解釈の批判を通して、永遠回帰肯定を描写する重要なテキストの中に「力の快」の思想が見出せることを示した。

研究成果の概要（英文）：

Making clear the Nietzsche's later idea of "pleasure of power", this study presented a new interpretation that overcomes some problems of past interpretations about development of Nietzsche's thoughts and about his central thoughts: It was shown that both the definite change in Nietzsche's view of the tragedy and the meaning of his central thoughts become clear from the standpoint of "pleasure of power" and that through exact reading *Zarathustra* and criticizing past interpretations of this book, the idea of "pleasure of power" can be found out in the important text closely related to acceptance of eternal recurrence.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2012年度	1,100,000	330,000	1,430,000
計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：西洋哲学 ニーチェ 悲劇の誕生 ツァラトストラ 永遠回帰 力への意志

1. 研究開始当初の背景

ニーチェ研究において、永遠回帰・力への意志の両中心思想、またニーチェ思想全体の展開と変化という大きな問題については、解釈上の大きな進歩が近年見られず、定説の形成にも至っていない。これらの問題に研究代表者は長年正面から取り組み続けいくつかの成果を示してきたが、「力の快」の観点は

そこにブレイクスルーをもたらすものである。以前の研究ですでにアイデアの概要は示していたが、より緻密なテキスト解釈と過去の研究の精査により、解釈の説明力と問題解決力をさらに説得的に示す必要があった。

本研究が示す解釈は、永遠回帰伝達の手紙である主著『ツァラトストラ』の作品理解にも大きな影響を及ぼすと予想された。研究代

表者は以前から、この著作の3部、4部の構造問題や全体的理念についての解釈を提示してきた。また当初国内では、村井則夫『ニーチェツァラトストラの謎』、細川亮一『道化師ツァラトストラの黙示録』といった興味深い作品理解が生まれていた。しかしこの文学的な名著で用いられる重要な形象やモチーフは、「力の快」の観点から初めて明晰に理解できると考えられた。

さらに、「力の快」に定位した解釈は、ニーチェ思想全体の展開についての理解も大きく変えると予想された。研究代表者は以前から、「悲劇」から「悲劇を笑う高み」へという図式で初期から後期への思想の変化を捉えてきた。「力の快」の観点はこの解釈を本質的な点で補完する。また研究代表者は、『道徳の系譜』の作品理解に基づき、ルサンチマンからの道徳創造を肯定的に捉えるというユニークな解釈をすでに提示しているが、「力の快」への着目はこの解釈も本質的な点で補強してくれる。

2. 研究の目的

本研究は、それまでの研究代表者の研究成果を踏襲しつつ、より詳細かつ包括的な解釈を行い、新しいニーチェ像を大胆に提示するものである。以下を目的とした。

1) 永遠回帰・力への意志について緻密なテキスト読解を行い、近年の研究成果で提示した「力の快」に定位する解釈をより説得的な形で提示する。

2) 「力の快」の観点が両中心思想の解釈史上の諸問題の多くを解決に導くことを示す。

3) 両中心思想の解釈をベースとして主著『ツァラトストラ』の新しい作品理解を提示する。重要な比喩的形象やモチーフについて、従来にない解釈を示す。

4) 処女作『悲劇の誕生』期の思想と永遠回帰着想後の後期思想との断絶と連関を、「力」の論点から新しい形で鮮明に描く。

5) 「力の快」の観点から後期の道徳批判の問題に光を当て、従来の理解を刷新する。

6) 上記の解釈に基づき、ニーチェの西洋思想史上の意義を捉え直す。

上記の目的に沿ったニーチェ解釈は、以下のような特色、独創的な点、意義をもつ。

① 永遠回帰解釈の基本テキストについて、通説的解釈よりも説得力ある解釈を提示する。本研究が注目する重要なテキストには通説的解釈が暗黙に存在し、近年でも細川の前掲書がその解釈を明快に示している。しかしこの通説はいくつか大きな難点を持っている。本研究はその難点を明確に示すとともに、

「力の快」に定位した解釈がより整合的で魅力的な解釈であることを示す。

② ①の解釈が、永遠回帰・力への意志の解釈史上の大きな諸問題について高い説明力・問題解決力をもつことを示せる。伝統的解釈の多くは両思想の関連を見出せていない（ヤスバース、レーヴィット等）。ハイデガーなどは例外的に両者の関連を解釈したが、あくまでも自らの哲学の枠組みを当てはめたものでしかなかった。近年の国内外の研究もそうした状況を打破していない。しかし本研究は「力の快」が両思想の核心にあることを示すことにより、両者の内的連関を明確に説明できる。またこの観点から、両思想の多様な側面や構造についてこれまで以上に明晰な解釈・説明を与える。

③ 上述の中心思想解釈に基づき、『ツァラトストラ』の主要な形象やモチーフを中心思想と関連させてより魅力的に解釈できる。『ツァラトストラ』は文学的に多様な読解を許す著作であり、その主要な形象・モチーフについては近年の解釈も独自の魅力ある解釈を提示している。しかし従来の解釈は総じて、これらの形象・モチーフの本質にある「力」の論点を捉えられていない。「力の快」に永遠回帰と力の意志の本質的連関を捉える本研究のみが、それを捉えることを可能にする。

④ 「力の快」に両中心思想の本質を見ることにより、ニーチェ思想全体の展開と変化をこれまでになく明晰に示すことができる。従来のニーチェ研究はテキスト時代の考慮が非常に薄い。典型例として、悲劇観やディオニュソス概念の解釈に際して安易に処女作『悲劇の誕生』が用いられる。しかし本研究は、「力」の論点の有無において永遠回帰着想前後の思想の変化を鮮明に描く。それによって、上述の研究状況の問題点を指摘し、初期、後期それぞれの通説的理解を大きく修正する。

⑤ 西洋思想史上のニーチェの特徴と意義を捉え返す。本研究は、「力の快」に生の肯定と世界の本質の両者を見る点に、ニーチェ倫理思想と存在論の一体性と独自性があることを明らかにする。これによって、他の思想家との連関について新たな展望が開かれる。

3. 研究の方法

研究目的に即し、以下の計画・方法で研究を行った。（研究開始当初は1）～6）の項目があったが、ここでは特に実際に研究成果をあげた1）～4）についてのみ記す）。

1) 「力の快」に定位した永遠回帰・力への意志の解釈を緻密なテキスト読解によっ

て示す

①永遠回帰の重要テキストの解釈と通説との対比

永遠回帰解釈の第一のテキストは主著『ツァラトウストラ』である。すでに最重要部分の最小限のテキスト解釈は示しているが、自説の説得力を増すためにより詳細な解釈を示す。さらに通説的解釈を自説と対比させて批判し、説得力の違いを鮮明にする。その上で、他の公刊著作の重要箇所、さらに永遠回帰着想時の草稿などの重要な遺稿断片を包括的に解釈する。あらゆる関連テキストを扱えなくとも、標準的な研究よりもはるかに包括的で説得力ある解釈を提示できる。

②力への意志に関わる重要テキストの解釈

力への意志について体系的に論じた著作はないため、断片的な思想を解釈者がいかなる視点で体系づけるかが問題である。研究代表者はすでに、いくつかの遺稿断片に基づき力への意志における「力の快」の論点の重要性を指摘している。しかし本研究では、「力の快」のアイデアこそが力へ意志思想の源泉であることをより説得的に示すことを試みる。その方法として、永遠回帰着想直前の著作『曙光』に力の快のアイデアの萌芽を捉え、永遠回帰着想後のその思想の発展形態が力への意志思想に結実することを示す。

2) ニーチェ研究史上の諸問題に対する、「力の快」に定位した解釈の説明力・問題解決力を示す

両中心思想の間に明確な関連性を見出さない、または矛盾を見る解釈（ヤスパース、レーヴィット、ジンメル等）や、関連性を見るが説得力を大きく欠く解釈（ハイデガー、フィンク、ドゥルーズ等）などに、伝統的解釈を分けて整理する。また、これに類する近年の解釈も整理しまとめる。これらの過去の解釈と対比させることにより、両者の本質的連関を見る本研究の解釈の優位性を明確にできる。また、「力の快」の観点から両思想の多様な側面を解釈し、この観点の説明力を示すことができる。

3) 中心思想の解釈に基づき、『ツァラトウストラ』の新しい作品理解を示す

①精神の三つの変容（「駱駝—獅子—子供」）の解釈

精神の三つの変容は重要箇所として伝統的にナウマンやレーヴィット等の注釈者、解釈者から注目され、近年の国内の研究もその解釈に多くの紙面を割いている。そのような過去の解釈を整理した上で、中心思想の解釈に基づき新しい解釈を示す。三つの形象の描写の本質的な部分が「力の快」から明晰に解釈でき、各形象を力の強さの発展段階として

捉えられるという見通しを得ている。

②ツァラトウストラの動物（ヘビ、ワシ）の解釈

ヘビとワシという重要な形象も、思想的・文学的観点から多様な解釈を許してきた。「力の快」の観点はこれらの形象の理解をも深めることができる。具体的には、ワシを永遠回帰肯定へ導く力への意志の象徴と捉え、ヘビを力への意志の重要な側面である認識への意志の象徴と捉える解釈を構想している。この新しい解釈により、永遠回帰と力への意志の本質的な関係性が『ツァラトウストラ』全体を規定していることを明らかにできる。

③対立物の一体性というモチーフの解釈

『ツァラトウストラ』では、深淵と山頂、真夜中と正午、重さと軽さというような対立物の一体性というモチーフが重要な場面で繰り返し現れる。本研究が明らかにする「力の快」における快と苦の一体性から、このモチーフの意味と重要性を明晰に理解できることを示せる。

4) 永遠回帰着想後の思想の決定的変化を「力」の思想の有無によって示し、翻って初期思想を捉え直す

①悲劇観の変化と「力の快」の着想の相即性を示す

研究代表者はすでに、永遠回帰着想後の思想の展開を「悲劇」から「悲劇を笑う高み」へという悲劇観の変化において捉えるという解釈を提示している。本研究では、この悲劇観の変化の本質に「力の快」についての着想があることを示し、これまでの成果をより本質的な次元から補完する。すでにアイデアは示しているため、より詳細なテキスト解釈により説得力を増すように努める。

②処女作『悲劇の誕生』の新しい作品理解を通して初期思想を捉え直す

上記①に基づき、『悲劇の誕生』の詳細なテキスト解釈による作品理解を通して、初期の悲劇観を従来になく鮮明に描く。具体的には、悲劇の快を問う点に『悲劇の誕生』期と後期の一貫性を捉えよう一方、この処女作ではそれを審美的にのみ解釈しており「力」の論点を全く持っていない、ということを示せる。またこの成果に基づき、従来のニーチェ研究、特に悲劇に関わる研究におけるテキスト時期軽視の傾向の問題点を指摘することで、本研究の意義をよりはっきり示すことができる。

4. 研究成果

平成23年度は、研究目的1)「永遠回帰・力への意志について緻密なテキスト読解を行い、近年の研究成果で提示した「力の快」

に定位する解釈をより説得的な形で提示する」および、4)「処女作『悲劇の誕生』期の思想と永遠回帰着想後の後期思想との断絶と連関を、「力」の論点から新しい形で鮮明に描く」に関して主に研究を進め、二件の学会発表を行った。

鹿児島哲学学会における発表「ニーチェ解釈における「力の快」の射程」では、主として研究目的1)に即した成果を発表した。研究方法1)、2)に基づき、永遠回帰および力への意志思想に関わる重要テキストを「力の快」の観点から解釈し、この解釈が過去の通説的解釈における問題点を解決するより説明能力が高いものであることを示し、その解釈としての優位性を明らかにした。

西日本哲学学会における発表「悲劇の快をめぐるニーチェ思想の決定的転回」では、主として研究目的4)に即した成果を発表した。研究方法4)に基づき、『悲劇の誕生』の作品理解を通して、初期と後期の悲劇観の変化が「力」の論点の有無において明確に捉えうることを明らかにし、かつこの変化と永遠回帰着想が密接な連関をもっていることを示した。また、ニーチェ思想の変化という問題に関する過去の重要な研究成果との対比により、本発表の解釈が従来の解釈以上の説明力と問題解決力をもつことを示した。本発表によって『悲劇の誕生』の本質とそのニーチェ思想上の位置づけがこれまでになく明確化されたとともに、研究目的1)に関連して、悲劇観の変化こそが後期中心思想の核心にあることを示唆した。

平成24年度は研究目的に即して二本の研究論文を著した。「ニーチェにおける悲劇の快の変容」は、主に研究目的4)「処女作『悲劇の誕生』期の思想と永遠回帰着想後の後期思想との断絶と連関を、「力」の論点から新しい形で鮮明に描く」に即した内容である。本論文では、平成23年度西日本哲学学会大会における発表「悲劇の快をめぐるニーチェ思想の決定的転回」の内容をさらに洗練し、悲劇の快の解釈がニーチェの一貫した主題であることを明確にした上で、初期と後期のその解釈の差異を「審美的快」から「力の快」への変化として鮮明に描いた。さらに本論文の解釈の意義を最新のニーチェ研究との比較において示した。また本論文のこのような内容は、研究目的2)「「力の快」の観点が両中心思想の解釈史上の諸問題の多くを解決に導くことを示す」にも大きく寄与するものである。

「酔歌」、「救済について」、「幻影と謎」の新たな解釈——永遠回帰の肯定とは何か」は、主に研究目的3)「両中心思想の解釈をベースとして主著『ツァラトゥストラ』の新しい作品理解を提示する。重要な比喩的形象

やモチーフについて、従来にない解釈を示す」に即した内容である。本論文は、研究史上『ツァラトゥストラ』の中でも永遠回帰解釈にとって特に重視されてきたテキストに着目し、従来の通説的なテキスト解釈を批判し新しい解釈を示すことによって、永遠回帰思想の核心に迫るものである。そこで示された内容は、本研究課題がニーチェ中心思想の鍵概念として想定している「力の快」の論点をニーチェの主著の新解釈によって浮き彫りにするという、非常に重要な意義を持つものである。またその点において、研究目的1)「永遠回帰・力への意志について緻密なテキスト読解を行い、近年の研究成果で提示した「力の快」に定位する解釈をより説得的な形で提示する」にも大きく寄与するものである。

以上が本研究課題の研究成果の概要であるが、研究目的5)、6)については研究の進展が遅れ、具体的な成果を表すことができなかったことが反省点としてあげられる。これらの研究目的もニーチェ研究における重要な課題であり、引き続き研究を重ね、成果を示したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

①新名隆志、「酔歌」、「救済について」、「幻影と謎」の新たな解釈——永遠回帰の肯定とは何か、鹿児島大学教育学部研究紀要、査読無、第64巻、2013、1-17頁

②新名隆志、ニーチェにおける悲劇の快の変化、西日本哲学年報、査読有、第20号、2012、41-61頁

[学会発表] (計2件)

①新名隆志、悲劇の快をめぐるニーチェ思想の決定的転回、西日本哲学学会、2011年11月26日、九州大学

②新名隆志、ニーチェ解釈における「力の快」の射程、鹿児島哲学学会、2011年6月4日、鹿児島大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

新名隆志 (NIINA TAKASHI)

鹿児島大学・教育学部・准教授

研究者番号：30336078